

# 豊かな土づくりを基本に、環境にやさしい農業で おいしさと安全・安心を届けます。

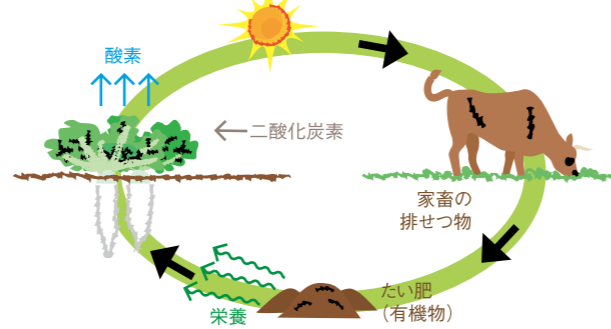
冷涼な気候を生かし、  
できるだけ農薬を使わないクリーン農業。

気候が冷涼な北海道では、温暖な都府県に比べ、農作物の病気や害虫の発生が少ないという特色があります。これを生かし、北海道では、化学肥料や化学合成農薬の使用を減らし、自然の力を生かした「クリーン農業」への取組を進めています。

クリーン農業の基本は「土づくり」です。北海道の農家では、田畑に牛のふんなどのたい肥を入れ、栄養豊富でたくさんの微生物が息づく土をつくり、農薬に代わる技術を取り入れています。これにより健康な作物が育ち、化学肥料や化学合成農薬の使用を必要最小限にとどめるようにしているのです。このように農家の人たちは手間をかけて、安全・安心な農作物を一生懸命育てています。



■土づくりのサイクル



## 食品についている 安心マークを チェックしよう!

国や北海道が定めた  
基準を満たして作られた食品には、  
安全・安心や品質を保証する  
マークが表示されています。



【北海道安心ラベル】  
土づくりを基本に、化学肥料や化学農薬をできるだけ使わずに生産した北海道の農産物に表示



【有機JAS】  
化学肥料や化学農薬を使わないなどのルールを守って作られた、有機農産物や有機加工食品に表示



【道産原料】  
北海道で生産された原材料を使用し、道内で製造された加工食品に表示



【北海道認証】  
道産の原材料にこだわり、高いレベルの安全・安心基準をクリアした優れた個性を持つ食品に表示

## 北海道に適した品種や技術の開発が進んでいます。

北海道では農作物を安定的に生産するために、冷涼な気候でも収量が多く、病気や害虫に強い品種づくり(品種改良)が進められてきました。また、農作業の負担を少なくするため、人工衛星を利用して位置を測定するシステム(GPS)を利用した農業ロボットなどの技術開発も行われています。

かつて北海道ではあまりお米が生産できませんでしたが、品種改良や技術開発により、現在では日本有数の生産地となっています。近年では特においしさにこだわった品種づくりが進められ、「ななつぼし」や「ふっくりんこ」など、全国で高く評価されるお米が登場しました。平成21年からは、さらにおいしさを追求した品種「ゆめぴりか」の生産が始まっています。

また、小麦の品種改良もさかんに行われており、うどんの原料用の「きたほなみ」やパンの原料用の「はるきりり」などが誕生し、北海道産小麦を使った商品も増えています。

■お米と小麦の品種開発例

	品種名	育成年
お米	きらら397	昭和63年
	ほしのゆめ	平成 8年
	ななつぼし	平成13年
	ふっくりんこ	平成15年
	おぼろづき	平成17年
小麦	ゆめぴりか	平成20年
	きたほなみ	平成18年
	はるきりり	平成19年

北海道の  
クリーン農業って  
どうのこと?



# 経済も、産業も 北海道農業は地域社会を支えています。

農業は、さまざまな業種と結びついている  
「**基幹産業**」です。

大きな規模の農業を営む北海道では、トラクターやコンバインなどの農業機械、牧場の設備、家畜の飼料の販売など、農業に関わる仕事をしている人がたくさんいます。また、農産物を消費者に届けるには、運送業、食品加工業、スーパー、飲食店など、さまざまな産業が関わっています。このように、農業は農産物の生産だけではなく、多くの産業と結びつき、地域社会を支えています。



## 自然にふれて、 農業を体験する「グリーン・ツーリズム」。

農業は、北海道にとって大切な産業である観光とも結びついています。美しく、雄大な北海道の景色を求めて多くの観光客が訪れていますが、緑豊かな農村で、休日を楽しむ「グリーン・ツーリズム」がいま注目を集めています。農業を通して、自然や文化にふれ、その土地のものを味わうことは人々に大きな安らぎを与えます。北海道には、農家が経営する民宿やファームレストランも数多くあり、グリーン・ツーリズムの先進地としてますます人気が高まっています。



## ！ふれあいファームへ行こう!

北海道には、農作業体験や宿泊、農産物の直売など、さまざまなメニューを用意して、観光客を受け入れている農場「ふれあいファーム」が道内各地にあります。

農業が  
地域社会を支えているのは  
どうして?





# 私たちの食卓は世界の動きによって大きく変わっていきます。

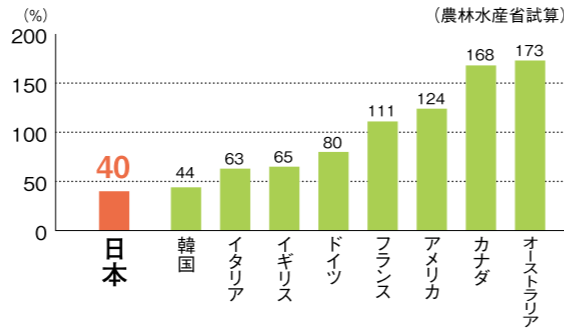
## 多くの食料を世界からの輸入に頼っている日本。

自分の国で消費される食べもののうち、自分の国でどれくらい作られているかの割合を「食料自給率」といいます。いま、日本の食料自給率は約40%しかありません。つまり60%もの食料を海外からの輸入に頼っていて、この割合は世界の先進国の中で最低の水準となっています。

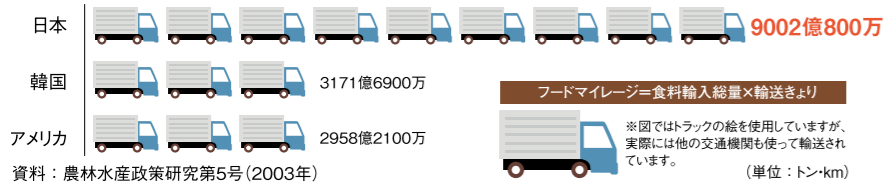
世界の人口は70億人を超え、さらに中国、インドなどの新興国の生活が豊かになるにつれて、将来的に地球上の食料が今より70%多く必要になると言われています。また、天候不順による不作などで食料の輸出が制限される場合もあります。そんな時、食料を輸入に頼っている日本は、食料を確保できなくなるおそれがあります。将来にわたって安心して暮らせるよう、食料自給率の向上は私たちみんなの問題なのです。



■主な先進国の食料自給率(2007年・カロリーベース)



## 環境に負荷をかけるフードマイレージが、日本は世界の第1位



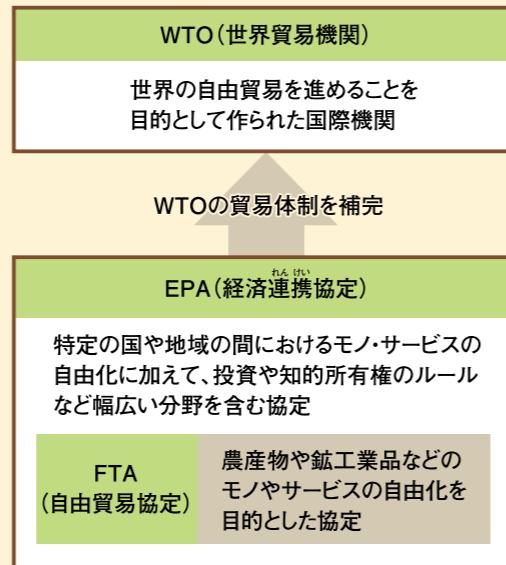
遠くから食料を運んでくると、それだけ石油などの化石燃料を使い、二酸化炭素の発生を増やすことになります。こうした食料の輸送時の環境への負荷を「フードマイレージ」といい、残念ながら日本は世界第1位です。国産のもの、地元のを食べれば、輸送きよりが短くなり、環境にもやさしくなります。

## 貿易の自由化って何だろう?

いま世界では、157か国<sup>\*</sup>が加盟するWTO<sup>（世界貿易機関）</sup>、特定の国や地域の間で協定を結ぶEPA・FTA交渉が進められています。これらは、加盟国や協定を結んだ国の中で、モノやサービスのやりとりを自由にするためのルールを決める話し合いの場です。これらの交渉では、輸入品の関税が議論されていますが、国間の格差を調整する関税が無くなると、国内の経済や生活に大きく影響することが予想されます。

たとえば、農産物の関税が無くなると、輸入される農産物の価格が下がり、日本の農家も低価格競争に巻き込まれ、農業を続けることが困難になるおそれがあります。さらには、日本の食料自給率がますます低下することが心配されます。このようなことから、国産と外国産の価格差が大きい米や小麦、砂糖、牛肉、乳製品などは、関税を基本として国内の生産を守ることが重要です。

<sup>\*</sup>2012年1月現在



食料自給率が低いと日本はどうなるの？



# 未来に向かう北海道農業を 私たちも応援しましょう。

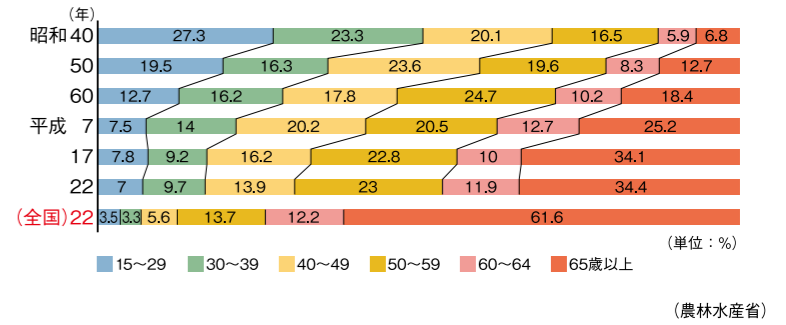
## 農業者の高齢化と、後継者不足が問題です。

日本では1960年代以降、農家や農業で働く人の数が減り続けています。そして、農業で働く人が高齢化しているのに、後をつぐ若者が減っている「担い手不足」という問題をかかえています。北海道でも、農業の担い手不足に悩んでいます。

この原因のひとつは、国が発展して工業やサービス業がさかんになったため、農業以外の仕事を選ぶ人が増えたことにあります。しかし、近年は食料を作るという農業の価値や、都市とはちがった農村での生活などが見直されています。



■北海道の農業者の年齢別比率



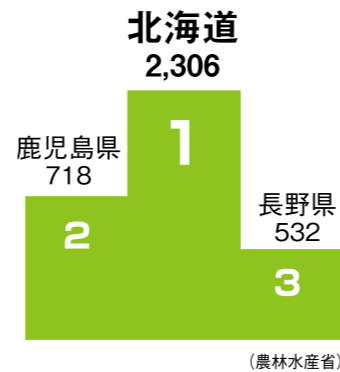
## 若い農業者とこれからの農業をバックアップ!

北海道では、農業の担い手不足を解消するために、さまざまな取組が行われています。新たに農業を始める人を応援する制度や、都市で働いている若者が農村に戻る「Uターン」を進める取組などです。

また、北海道には農業を学ぶための高校や大学があり、多くの若者が学んでいます。近年では、組織で農業を行う「農業法人」が増え、そこへの就職で農業という仕事を選ぶことができるようになりました。

多くの若者が農業に積極的にチャレンジすることで、活気ある農業・農村、活気ある北海道が作られていくことが期待されています。

■都道府県別農業法人数



## 農業法人を知ろう!

農業法人とは、農業を仕事にする組織のことです。多くの人が働く農業法人では、作物や作業ごとに担当を決めて農作物を生産しています。また、生産するだけでなく、食品に加工し、その加工品を直接消費者に販売したりもしています。農場でとれた農産物を使ったレストランなどを経営する農業法人も増えています。



これからの北海道農業に大切なことは？

